

原 著

## 「出会い」 実存的空虚を超えて

田坂 彩子

### ＜要 旨＞

現代の若者を蝕む「無気力・無関心」さは、情報化社会の中で、自己とのそして他者との時間をかけて練り上げられた真の「出会い」を経ずして構築された、あまりにも浅い人間関係から生じる「実存的空虚<sup>1</sup>」の象徴ともいえる。このV.E フランクルが指摘する「実存的空虚」に打ち勝つために決定的に欠けているもの、それは真の「出会い」の体験であると考えられる。マルティン・ブーバーの〈我—汝〉哲学を含む、ユダヤ・キリスト教的世界を象徴する聖書の中には、真の「出会い」を体験した者には生きる力が与えられ、自己の存在意義と他者への理解が生じ、自己を実存たらしめていく人生のコペルニクスの転換を成し遂げた例が数多く書かれている。本論文は、現代の日本を蝕む「実存的空虚」の根底に流れている問題を発見し、V.E.フランクルのユダヤ的「出会い」、そしてエミール・ブルンナーを代表するキリスト教的「出会い」の観点から、「実存的空虚」からの解放の糸口を発見していく。

キーワード：出会い、実存的空虚、日本の若者、「我と汝」、愛

### 序 論

現代の日本人の若者に浸透している好奇心の欠乏、生きる気力と情熱が湧いてこない現象、いわゆる生死への「無気力・無関心」さは、今の日本に始まった事ではなく、近年の全米、ヨーロッパにも同じような傾向が見られる。メディアやインターネットによる情報の氾濫、ゲームへの依存から起きる「脳内汚染<sup>2</sup>」などがこの一要因とされているが、このような世界的状況は、V.E.フランクルが指摘している所の「実存的空虚<sup>3</sup>」に蝕まれている状態である。引きこもりや自殺の原因にあげられるような自己表現や他人との関係性の欠如、また、現実に即さない架空の自尊心の高さ<sup>4</sup>などの現代人の特徴は、残酷な少年犯罪を引き起こすような非人間的な行動の主要因として考えられている。また、戦中、戦後などの人間の尊厳の極限状態を問われるような「死への恐怖」を意識する時代は過ぎ去り、日々を目的なしに平和に過ごせる状態から、文

化的に日本人が潜在的に持っている「甘え<sup>5</sup>」の性質が浮き彫りにされ、自己の責任をとる勇気の欠如から大いなる他者依存への傾向が見られる。顔と顔とをあわさずに成し遂げられる、携帯電話やバーチャルな世界でのコミュニケーションに偏る人間関係構築の図は、今後の日本、また世界の人間性にさらなる負の影響を与え続けるであろう。本論文が目指すものは、「出会い」を通してこの現代社会を覆う影である「実存的空虚」に打ち勝ち、本来の人間性を取り戻す過程を、ユダヤ・キリスト教の立場から明らかにする所にある。

### I 「出会えない」現代人

「出会い」について神学的見地から分析している人物の一人として、エミール・ブルンナーがあげられる。彼は自己の神学を「宣教神学」と呼んでいるが、日本のブルンナー研究の第一人者の一人である大木英夫氏

によると、その中心思想に目をとめて言うならば、「出会いの神学<sup>6</sup>」と名付けて差し障りはないという。ブルンナー神学は「出会い」に土台を置いているからである。ブルンナーは、マルティン・ブーバーの「我—汝」哲学、セーレン・オービエ・キルケゴールの実存哲学などの色濃い影響を受け、それらを結び合わせるにより「出会い」の神学的思想を形作った。

ブルンナーによると、「出会い」とは、〈人格〉と〈人格〉との「出会い」である。それゆえ、〈人格〉でないものは出会う事ができない。また、「出会い」においては、主体と客観との隔たり (detachment) を乗り越えるために、傍観的であることをやめ、自己投入することが必要である。すなわち、実存主義が言う「決断」(Entscheidung-ハイデッガー) や、「参与」(engagement-サルトル) がなくてはならない。ブルンナーの説くこの人格的実存主義は、このような自己投入を強調するが、そればかりではなく、他者なる人格との間の質的差別を認める。ブーバーの言葉で言い換えると〈我—汝〉の間の質的差別なしには、「出会い」も生起しえないということである。「他なる我」は、あくまでも他者なのであり、この質的差別が除外されるならば、仏教のように宗教は小我をもって大我の中に没入せしむといった形や、絶対者の無我的直感といった形での神秘主義に陥ってしまうからである<sup>7</sup>。それでは、人はどのようにしてこの他者との「出会い」を経験することができるのか。まずは、「言葉」による「出会い」を考察する。

「言葉」を媒体とした「出会い」はブルンナーによると以下のようなものである。「他なる我」はけっして体験できるものではなく、ただ聴くことによるのみ接しられる。他者は人間の想像(イメージーション)の産物ではないゆえに、想像(イメージーション)を中止し、相手が語りだす事に耳を傾けて聞くということなしにはけっして現実的な接触は起こらない。他者に聴かない者は、けっして他者を持たない。そして、他者を持たない人間は孤独である。孤独者は本質的に夢想家である。そして、孤独者の思惟は結局独語(モノローグ)であり、対話(ダイアローグ)ではない。そのような人間同士の出会いは「出会い」とはなっておらず、相互に独り言を言い合うという関係に陥っている<sup>8</sup>。この独り言としてのやり取りだけで社会と接している現代の日本の若者についての特徴を、町沢静夫氏は次のように述べている。

簡単に犯罪を犯してしまう若者の傾向の一つとして、「自分は誰よりも能力があると考え、それが当然

のように受容されるべきだ<sup>9</sup>」という思考が見られ、他人の気持ちへの共感性が乏しいことが強調されている。ここ数年は集団での犯罪ではなく、「ひとりの犯罪」が増えており、ほとんどが閉じこもっている人に見られるという。彼らは、対人関係を築くことが極めて困難であるのだが、大いなる過保護の中で育っているので、自尊心は本来の自分を遥かに超える架空のものとして育ち、ほんの些細な批判や失敗で簡単に挫折をしてしまい、その挫折を埋め合わせるかのように犯罪の世界で目立つ事によって自分を世界に見せつけてやる、という傾向が見られる<sup>10</sup>。すなわち、他人の存在を傷つけ、他者を自分より低い価値の存在として搾取することによって自己の存在価値を確認する、という結果を求めて犯罪を犯しているのである。言い換えると、孤独でありながら自立しているわけではなく、他者に依存している状態なのである。このような犯罪者のみならず、ここ最近流行の「新型うつ<sup>11</sup>」と呼ばれる精神の状態は、本来の鬱のように自分を責めるのではなく、他人を責める事が特徴とされており、多くの働き盛りの男女たちにもこの他者依存性が認められている。

これらから言えることは、このような現代の日本の若者は、自他の区別ができず、対人関係を持たず、他人を責めたり傷つけることによって自分の存在価値を確認する、という特徴を備えていることである。ここには主体性の欠如があり、それゆえ他人を責めることはあっても、自己の責任をとるという意志が欠けている。自分自身の人生を引き受けるという主体的責任を脇に置いて、自分を満たしてくれて当然であるとする他者への依存からくる怒りが、凶悪犯罪や自傷行為の動機となっているわけである。

このような自他の区別をつけることの出来ていない現代の日本の若者にとっては、ブルンナーの言うような「他者との出会い」を基とした「自己との出会い」が必要である。人は自分にとって絶対的なもの、自分を超越する大きな存在と「出会う」ことによって自分を知る事になる。この「出会い」はバーチャルな世界ではなく、顔と顔とをつき合わせて善きにせよ悪きにせよ現実の世界で人格同士が「対面」していくことである。子どもが愛を注いでくれる親に出会う事によって、また、好きな友や苦手な友と遊んだり喧嘩をすることによって、そして反抗期になると親にぶつかることによって、自他の区別を覚え自分自身を見いだして行くように、自分を超越した何者かに遭遇する「出会い」の経験は「自分」を知る経験へと導く。この他者との

遭遇により、自分自身の小ささ・弱さに気づき、自分自身と新たに出会って行くことが可能になる。他者に聴く事ができない現代人は、然るに自分自身とのこの新たな「出会い」を放棄しているとも言え、それゆえ、何者とも「出会う」ことができないと考えられる。

## II フランクルにおける「実存」と「出会い」

フランクルは、一般に、現代人は生きていけるだけの手段はもっているが、「何のために生きるのか」、という目的がわからなくなっていると主張する。この虚無感、科学を土台とする現代人の生活にしみついたニヒリズムとも言える。このニヒリズムの危険性は、「結局人間は、遺伝や環境、状態、事態、状況の犠牲者にすぎず、主体的に生きる必要も運命を克服する必要もないばかりか、不可能である。なぜなら人間は自由ではないし、ましてや何の責任もない」という考えに陥るからである。フランクルは、通俗科学や唯物論の限界を説き、宿命を超えて「人間には態度を決める自由がある。しかし、人間が自由な存在であるならば同時に責任ある存在である」と述べている。人間は自分の行為、また、犯罪に対して責任がある存在であり、その責任をごまかすことは、自分の人間としての尊厳をそこなうことになる、とも述べている<sup>12</sup>。この自由の中での責任を伴う主体的決断が、フランクルにおける実存の基礎となっており、フランクルによると、その決断によっては人間は自分を変えうる存在なのである。

フランクルはブーバーの「我—汝」哲学を超えて、どんな対話もそれが「ロゴス<sup>13</sup>」（意味の世界）の次元に入って行かなければ、本当の対話ではないことを主張する。「ロゴス」のない対話、何らかの志向対象への方向性を持たない対話は、実は独り言が相互になされているにすぎない。この対象に向かわない対話が見落としているものは、フランクルの言う出会いの「自己超越性(self-transcendence)<sup>14</sup>」であり、この自己超越性とは、人間は自分以外の別の何かに関わろうとし、別の何かに向かう存在であることを意味している。単なる独り言の自己表現にとどまっている対話は、現実の人間の自己超越的な特質を生かしていない。本当の「出会い」とは、フランクルによるとロゴスに向かって開かれた共同存在の一つの様式である。それは相手の人が自分自身を超越してロゴスへ向かう事を認め、さらに自分も相手も共に相互に自己超越していくこと

を促すものである<sup>15</sup>。このフランクルにおける「自己超越性」は、相互が満たすべき意味に向かうのみならず、価値ある大切なもう一人の人格に向かっていくことをも含んでいる。人は「出会い」によって、相手のまさに人間らしさを実感する。つまり、人は「出会い」という出来事を通して、互いが他の誰とも交換不可能な、固有名詞を持った唯一無二のかけがえのない人であることを体験するのである。

フランクルはその著作集の中で、何度も、「われわれは人生から何を期待できるか」という問いから「人生がわれわれに何を期待しているのか」という問いへのコペルニクス的転回について述べている<sup>16</sup>。この転回が「自己超越」と呼ぶもので、人生を主観から客観へと転回させるものである。これは、＜自己という場＞から＜世界という場＞に出ることを意味している。時間的なもの、日常的なものは、有限なものが無限なものにたえず「出会う」場所であるとフランクルは述べている<sup>17</sup>。私たちが時間の中で創造したり、体験したり、苦悩したりしていることは、同時に永遠に向かって創造し、体験し、苦悩していることなのである。「われわれは、世界につうずる道をたどってのみ自分の自我に帰るのである。われわれが自分の不安から自由になれるのは、・・・自己放棄によって、自己を引き渡す事によって、そしてそれだけの価値ある事物へ自己をゆだねることによってである。これこそあらゆる自己形成の秘密である<sup>18</sup>」と彼は言う。

「フランクルの実存思想」の「実存」(Existenz)とは、語源的には「外にいで立つ」(ex-sisto)者のことであり、フランクルはこの原義に忠実であると言いうる。すなわち、自己は「外に出で立ち」「世界につうずる道をたどってのみ」本来の自己へと生成し、実存たりうるのである<sup>19</sup>。これが、フランクルの言う「自己」という実存の秘密であり、真の「出会い」を構築する不可欠な要素である。

## III イェスとの「出会い」による実存の回復

「外にいで立つ」姿勢、また「世界に通ずる道をたどってのみ」本来の自己へと生成していく過程は、ユダヤ・キリスト教的世界観の「信仰」の世界における「出会い」を分かりやすく表現している。

「出会い」という言葉は、イデーの世界を中心とするギリシア語の「見る」、「眺める」ということを意味する語群とは範疇的に区別されねばならない<sup>20</sup>。この

言葉は、神と人との契約を大切にすべしというヘブル的聖書的な思想態度から成る。契約を基底に持つ聖書の世界は、「出会い」の世界であり、聖書の思想は「出会い」の思想であるとも言える。さらにこの区別は、今日の神学で、自己のあり方を問う〈実存的〉なものと理論によって構築される〈世界観的〉なものとを区別することの根底に横たわるものである。ブーバーは「我—汝」という関係の完成された「出会い」は、イエス・キリストの生涯によって見られると述べている。そして、このブーバーにおける神との「出会い」のあり方は、ルカによる福音書の「ザアカイ」の物語においても見いだされる。

「ザアカイの物語<sup>21</sup>」におけるイエスとザアカイとの「出会い」は<sup>22</sup>、イエスがまずザアカイの下に立つ所から始まる。ザアカイはイエスを「見よう」として見ようとしたが、この「見る」という態度はイエスに関する興味に基づくもので、先に述べたようなギリシア的な「眺める」ことであり、イデーの世界に属するものである。しかし、イエスはザアカイの下に立ち、「見よ」あげて「名」を呼んだ。このイエスにおける「見上げる」とは、先のザアカイの「見る」とは質的に異なり、「眺める」ことではなく「尊い存在として認める」ということであった。また、「見上げる」とは、自分より高いものとして尊敬の意を表する事が含まれる。ザアカイを尊い存在として認めるために、下に立ち、見上げることによってイエスはザアカイに出会った。英語で他者を理解することを指す *understand* という言葉が表しているように<sup>23</sup>、*under* (下に) *stand* (立つ) というイエスの姿勢は、ザアカイを理解するために不可欠な姿勢であった。

次にイエスは、眺めていただけのザアカイの「名」を呼ぶ。ここで、「眺めて」いただけのザアカイは、イエスにかけがえのない存在として「名」を呼ばれたことによって、イエスと「出会った」のである。「名」を呼ぶ、ということは交換不可能なかけがえのない存在として他者を認めることであり、聖書の世界では「名」が極めて重要である<sup>24</sup>。それに対し、「名」が大切に扱われないことや「名」が剥奪されることによって世界では悲劇が繰り返されている。聖書のヨハネの黙示録によると、世界の終末には人類が番号化していくことに対する警告がなされているが、人権を無視する全体主義の傾向の一つとして、人を番号化すること、また「名」を取り上げる事があげられるように、「名」は人間の尊厳と密接な関わりを持つ。ここではイエスが「名」を呼ぶ事によって、ザアカイの尊厳が回復し

たとも言える。

その後、イエスは「家」に泊まり共に食事をした。聖書によるとその間、特にイエスは教えを述べたわけでも説教をしたわけでもない。ただ、ザアカイを認め、ザアカイを「価値ある存在」として受け止め共存しただけである。しかし、この他者を「愛」をもって価値ある存在として認めるイエスの存在によって、ザアカイの人生は180度変わってしまう。物語の中で、彼は先に述べた現代の若者の問題と共通するような、他者へ強さをひけらかすことによって自己の存在を確立し、本質的には孤独の中に引きこもっていたことが伺える。ところが、「愛されている」ことを知ることによって、「他者のために生きる」「他者を尊重し、他者に向かって生きる」愛する者へと変えられていく180度の転換を見せたのである。イエスとの「出会い」は、ザアカイという人格を根底から変えてしまった。彼は、イエスと出会う事を通して、本来の自分自身を発見し、ここに自己との新たな「出会い」が生じた、と考えられる。

ザアカイは、財産の半分を貧しい人々に施し、だまし取っていたものを4倍にして返すことを宣言する<sup>25</sup>。ここでイエスは今日この家に「救い」が訪れたことを宣言し、ザアカイが「アブラハムの子」であったことを強調する<sup>26</sup>。船本弘毅氏によると、このイエスの表現は、ザアカイを現在の職業によって見るのではなく、彼の信仰に基づいて見ようとする姿勢が伺え、しかもそれは血筋や律法によるのではなく、信仰と信仰的なわざにおいてアブラハムと同質の者のことをこう呼んだ、とされる。イエスは最後に、「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」と述べている。この「失われたもの」とは、イスラエルの家の失われたもののことを指す。聖書では、あるものの本来あるべきところから逸脱して誤った場所にあるとき、それは失われていると言われるのである。したがって失われたものは、本来あるべき位置にもどされねばならないのであり、その時大きな喜びが天にあるのである。人が神から離れている時、それは神の視点からは「失われた存在」である。神のもとに立ちもどり、本来あるべき場にもどるなら、その人は失われていたのに、見出されたと言えるのである。

ザアカイはこの失われた者へのイエスの深い愛によって、本来の使命を負った自己アイデンティティを取り戻し、自分自身を通して他者を祝福するというアブラハムの時代からの神のミッションを回復し<sup>27</sup>、これをイエスは「救い」と表現したと思われる。先の言

葉を用いると、生きている意味がわからないという「実存的空虚」からの解放であり、自己の回復、実存の回復が起こったのである。イエスのこの「失われたものを捜して、救うために来た」ことは、イエスが「出会い」を通して、愛されるべき存在であるザアカイを虚無の淵より引き上げ、彼の実存回復が生じることを意味している。つまり、この「出会い」では、有限なものが無限なものに出会うという、フランクルの言う所の「自己超越」が生じている。聖書に於けるもう一つの例として、ルカによる福音書23章32節以下に記されているイエスとともに十字架につけられた二人の犯罪人にも、この「出会い」の要素が見られる。

イエスとの「出会い」に関して二人の犯罪人は対称的であった。すなわち、同じ状況において、「お前はメシアではないか。自分自身を救ってみろ」と言った犯罪人に対して、イエスは何も対話をしていない。しかし、次に「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った犯罪人に対して、イエスは「あなたは今日、わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。前者の犯罪人はイエスを「お前」と呼び、後者の犯罪人は「イエス」という名前を呼んだ。また、イエスを人格的にとらえていた後者の犯罪人は「イエス」に『あなた』の御国においでになるときは、『わたし』を思い出してください、と願った。またイエス自身も「あなた」と「わたし」といういい方で彼に回答している。ここでは、前者の犯罪人が「イエス」を傍観的に「眺めた」出来事とは対称的に、後者の犯罪人とイエスとの間には「かけがえのない存在として認める」という「出会い」が生じている。すなわち、このイエスの『あなた』は今日『わたし』と」という言葉によって、「我」と「汝」というブーバーの言う「出会い」の関係が成立したと捉えられる。この後者の犯罪人は、過去にどのような過ちを犯したどうかに関わらず、イエスとの「出会い」を通して瞬時に、有限の世界から無限の世界である「楽園」へと招き入れられたのである。神と人との「出会い」は神の「先行する<sup>28</sup>」一方的な働きかけだけでは成り立たず、人間側も、神に聴き、神を価値ある存在として認め、対話していくという積極的「関わり」が必要であり、永遠の世界に開かれた存在として「自己超越」する時に、神との「出会い」を体験していくのである。神との「出会い」はこの世の有限の世界を超えて、永遠の世界、無限の世界へと開かれた「出会い」なのである。

#### IV 「出会い」のユダヤ・キリスト教的考察

今まで見てきたように、ユダヤ・キリスト教的観点から見ると、神と「出会う」ということは、神の〈語りかけ〉に聴くということなしに、あるいは現代神学の言葉で言えば〈啓示〉に聴くということなしには、けっして可能とならない。そもそも「出会い」は人格と人格との出会いであり、他者に聴くことなしには起こりえないからである<sup>29</sup>。哲学的思惟は、たとい哲学史や思想史を媒体としても、本質的に理性の独語（モノローグ）であるが、これに対して、信仰とそれに基づくユダヤ・キリスト教における神学とは、本質的に対話（ダイアローグ）である<sup>30</sup>。ブルナーによると、神は人間の哲学的思惟が独語（モノローグ）を中止して、「神に聴く」というあり方をとり始める時、人間と出会うのである<sup>31</sup>。この「出会い」は神の側からの啓示と、信仰者が神にゆだねるというフランクルにおける「自己超越」を成す時に生じる。この信仰に於いての「出会い」が起こる場合として「祈り」は重要に思われる。「祈る」時、人間が神に語りかけている限りで聴き手は神であるが、人間は神の語りかけにも耳を傾けるものとされているのであって、この場合、祈りを通しての祈り手の「自己超越」が起きており、聴き手の神との間でフランクルの言うロゴスに達しているのである。イエス・キリストはご自身の生涯を通して模範を示されたように、最も重要な掟として「神を愛すること」、「自分を愛するように隣人を愛すること」を強調したが、この「愛する」という外の世界への自己投入的行為は、人間に「出会い」を可能にする「自己超越」を促し、神とまた他者と「出会って」いくための自己を自己たらしめるために必要な道しるべとしての役割を担っているように思われる。

フランクルによると、人生の意味は、「人生が何をその人に期待しているか」という問いに気づき、独自の人生の使命を求めることによって見出されるということであった。ユダヤ・キリスト教的に言えば、その使命（ミッション）は神から与えられたものであり、託されたものである。フランクルはこれに関連して、「人間の外にあるもの」を人格的な存在様式をもつ「審判者」とも理解し、この「審判者」を「神なる汝」とも言い換えている<sup>32</sup>。

それぞれの人間には、この「神なる汝」から具体的な使命が与えられているが、その根底を成すものとして、イエスはその使命の土台を「神を愛し」「隣人を愛する」ことに要約している。聖書が語る「神は愛で

ある」ことの意味は、神はその愛の存在自体が三位一体という関わりで構成されており、父子聖霊が互いに「自己投入」することによって愛の具現化としての「出会い」を象徴しているとも言える。この「出会い」をその本質とする神と人間との「出会い」は、人間が自己と関わる中で、人生における本来的使命を見いだし、実存的空虚から解放され、その人がその人らしい歩みをする事ができる機会を提供しているのである。

## 結 論

主体的決断の責任から逃げる習慣がついてしまった現代人のように、受け身的な姿勢で自らの置かれた環境を受け取る時には、その「受け身」ゆえの苦しみの連鎖から永遠に抜け出ることができない。しかし、この「受け身」的姿勢から立ち上がり、フランクがまさに収容所の中で仲間たちに最後まで呼びかけ続けた「自らが目の前にある苦しみを選択して選びとる」という主体的な姿勢に移行し、収容所の外で待つ、自己を超えた愛する「他者」との再会にその希望の源を見いだすならば、その者は命を取り戻し、「実存」を取り戻す。イエスが「愛」をもってザアカイと出会ったことによりザアカイが「立ち上がり」、実存的空虚から解放され、「実存」を取り戻す過程は、現代においても重要な解放へのプロセスである。現代人にとって「実存」とはこの意味で、他者との「出会い」の中で、自分自身に新たに「出会い」続け、自分自身となり続ける過程である。

現代の日本には黒雲がかかったごとくに、自殺や鬱、引きこもり等の問題が後を絶たない。このような中、一人一人が真の「出会い」を通して日々新たな実存を取り戻して行くためのプロセスは、教育の現場において重要視されるべきである。筆者は、教育現場に携わる者の一員として、「出会い」という出来事の重要性を通して、学生のみならず、現代社会に共に生きる人々の「実存的空虚」の問題に取り組む続けることの重要性を、今問われている。

## 注

- 1 V.E.フランク『意味による癒し』山田邦彦監訳、春秋社、2004、18頁
- 2 岡田尊司『脳内汚染』文芸春秋、2008、128-138頁
- 3 V.E.フランク『意味への意志』山田邦彦訳、春秋社、2002、6頁
- 4 町沢静夫『自分を消したいこの国の子どもたち』PHP研究所、2001、11頁
- 5 土居健郎『甘えの構造』弘文堂、1971
- 6 大木英夫『ブルンナー：人と思想シリーズ』日本基督教団出版部、1962、65頁
- 7 大木英夫、前掲書、69-71頁
- 8 大木英夫、前掲書、71頁
- 9 町沢静夫『自分を消したいこの国の子どもたち』PHP研究所、2001、11頁
- 10 町沢静夫、前掲書、60-61頁
- 11 伝田健三『若者のうつ：新型うつ病とは何か』筑摩書房、2009
- 12 V.E.フランク『宿命を超えて、自己を超えて』山田邦彦・松田美佳訳、春秋社、1997、4-7頁
- 13 V.E.フランク『<生きる意味>を求めて』諸富祥彦監訳、春秋社、1999、104頁  
志向対象になり得るものすべて、言語が指し示す対象のすべて、主体と主体がお互いにコミュニケーションしているその二人の人間によって「意味される」対象のすべて、それらが合わさり構造化された全体は「意味」の世界を形成する。そしてこの「意味の宇宙」のことを表現する言葉として、フランクは「ロゴス」という言葉を用いている。
- 14 V.E.フランク、前掲書、7頁、44頁
- 15 V.E.フランク、前掲書、105頁
- 16 V.E.フランク『夜と霧』霜山徳爾訳、春秋社、1961、183頁
- 17 V.E.フランク『それでも人生にイエスと言う』山田邦彦・松田美佳訳、春秋社、1993、215頁
- 18 V.E.フランク、前掲書、216頁
- 19 V.E.フランク『それでも人生にイエスと言う』、216頁
- 20 大木英夫『ブルンナー：人と思想シリーズ』、68頁
- 21 ルカ19: 1-10。以下、聖書からの引用は『新共同訳聖書』による。
- 22 船本弘毅『説教者のための聖書講解—ルカによる福音書—日本基督教団出版局、1989、475-480頁
- 23 リーダース・プラス第二版、研究社、1994によると、understandは（下に立つ・支える・援助する）の意味がある。
- 24 渡辺和子『名前で呼ぶ教育』西南女学院基督教教育年報第4号、西南女学院宗教委員会、2007、1-23頁
- 25 F.B.クラドック『現代聖書注解—ルカによる福音書』日本基督教団出版局、1997、362頁

- 26 船本弘毅『説教者のための聖書講解—ルカによる福音書 日本基督教団出版局, 1989, 479頁
- 27 加藤常昭『ルカによる福音書4—加藤常昭説教文集16』ヨルダン社, 1996, 74頁 家族が祝福されるということ。
- 28 青野太潮『どう読むか、聖書』朝日選書490, 朝日新聞社, 1994, 45頁
- 29 大木英夫『ブルンナー；人と思想シリーズ』, 71頁
- 30 大木英夫, 前掲書, 72頁
- 31 ブルンナー『神と人；人格的存在に関する四つの研究』管岡吉訳, 長崎書店, 1934年, 54頁
- 32 V.Eフランクル『識られざる神』（フランクル著作集7, 宮本忠雄・小田晋訳, みすず書房, 1957, 64頁, 73頁
- V.Eフランクル『〈生きる意味〉を求めて』諸富祥彦監訳, 春秋社, 1999
- V.Eフランクル『意味への意志』山田邦男訳, 春秋社, 2002
- V.Eフランクル『意味による癒し』山田邦彦監訳, 春秋社, 2004
- 大木英夫『ブルンナー；人と思想シリーズ』日本基督教団出版部, 1962
- 土居健郎『甘えの構造』弘文堂, 1971
- 船本弘毅『説教者のための聖書講解』ルカによる福音書 日本基督教団出版局, 1989
- 青野太潮『どう読むか、聖書』朝日選書490, 朝日新聞社, 1994
- 加藤常昭『ルカによる福音書4—加藤常昭説教文集16』ヨルダン社, 1996
- F.Bクラドック『現代聖書注解—ルカによる福音書』日本基督教団出版局, 1997
- 町沢静夫『自分を消したいこの国の子どもたち』PHP研究所, 2001
- 渡辺和子『名前で呼ぶ教育』西南女学院基督教教育年報第4号, 西南女学院宗教委員会, 2007
- 岡田 尊司『脳内汚染』文芸春秋, 2008
- 伝田健三『若者のうつ：新型うつ病とは何か』筑摩書房, 2009
- 共同訳聖書実行委員会『聖書—新共同訳』日本聖書協会, 1987
- リーダーズ・プラス第二版, 研究社, 1994

### 参考文献

- ブルンナー『神と人；人格的存在に関する四つの研究』管岡吉訳, 長崎書店, 1934
- ブルンナー『聖書の「真理」の性格—出会いとしての真理』弓削達訳, 日本基督青年会同盟, 1950
- V.Eフランクル『夜と霧』霜山徳爾訳, 春秋社, 1961
- V.Eフランクル『識られざる神』（フランクル著作集7）, 宮本忠雄・小田晋訳, みすず書房, 1962
- V.Eフランクル『それでも人生にイエスと言う』山田邦男・松田美佳訳, 春秋社, 1993

## “Encounter” Freedom from the Existential Vacuum

Ayako Tasaka

### <Abstract>

The “lethargy and apathy” of today’s young people could be called a symbol of “the existential vacuum.” It has been caused by casual and temporary human relationships without any “authentic encounter” in the information-oriented society today. This “authentic encounter” is essential for young people to overcome “the existential vacuum” which V. E. Frankl discussed. There are many examples of this “authentic encounter” by the Judeo-Christian view in the Bible including the “I-Thou” relationship of Martin Buber’s philosophy. This encounter gives people a vitality to live, a sense of meaning of their life and the heart to consider others, and a Copernican turning point in their life to experience self-realization. This paper will clarify the underlying issues of “the existential vacuum” that destroys Japan today, and find a clue to the remedy of “the existential vacuum” not only from V. E. Frankl’s Jewish perspective of “encounter,” but also from a Christian perspective of “encounter,” a perspective represented by Emil Brunner.

Key words: encounter, existential vacuum, Japanese young people, “I-Thou”, love